

## 地球環境時代と仏教(上)

川 田 洋 一

### (一) はじめに

生ける存在としての緑の惑星「ガイア」が病んでいる。オゾン層の破壊、森林、特に熱帯雨林の減少と砂漠化の進行、生物種資源の消失、酸性雨、海洋汚染、開発途上国への公害輸出、有害廃棄物の越境移動、そして地球の温暖化等が相互に関連しつつ、地球生態系の破綻へとつき進みつつある<sup>1)</sup>。

本年八月、私は英国エグハムで行われた第四十回パグウォッシュ会議に出席する機会を得た。「二十一世紀の安全な世界に向けて」のテーマのもとに、八つのワーキング・グループがもたれたが、そのなかの一グループで地球環境問題がとりあげられた。ここでは、「環境悪化と経済発展の間の矛盾をどうするか」という課題のもと、人間の基本的欲求、現代消費社会の要求と環境保全の間の葛藤、環境保護のための経済的手段、科学技術の移転等が討議された。また、全体セッションでは、地球温暖化とCO<sub>2</sub>の問題がとりあげられた。パグウォッシュ会議においても、地球環境の問題が大きなテーマとなっているのは、人類がたとえ、核戦争の脅威をのりこえたとしても、地球生態系が破綻をきたせば、人類を含む生物そのものの生存の基盤が崩壊してしまう故でもあるだろう。特に、地球温暖化の問題は、

生命的存在としての地球という惑星が、その絶妙なるバランスを崩し、生物を存続させる条件を失いつつある前兆ともいえるであろう。

かつて、日本では、一九六〇年代から七〇年代にかけて、水俣病、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそくの四大公害を噴出して、公害先進国の汚名をきせられた。私も、一人の仏教者として水俣病、特に胎児性水俣病に関わり、企業の論理にはられた「魔性」を告発しつつづけたことがある。現在でも企業倫理の必要性が指摘されているが、七〇年代の企業の論理、企業にとっての最大利潤を追求するという論理のなかには、必然的に他者の生命を損傷し、ある場合は死へと追いやるという「魔性」をはらまざるを得なかったのである。御書に「鬼をば奪命者といふ魔入って功德をうばふ魔をば奪功德者といふ<sup>2)</sup>」と仰せである。水俣病等の公害は、まさしく、企業の論理のひきおこした「奪命者」「奪功德者」としての働きであった。この時には、企業は、主として、公害対策技術の開発に力をつくして、ハイテクを駆使して、「奪命者」としての働きをぬぐい去っていった。その結果、日本の企業は、世界で最も優秀な脱硫装置、脱煙装置を開発し、公害対策技術を進歩させていった。また、二度にわたる石油ショックに際しても、省エネルギー化を進め、日本経済は、成長をつづけながらもエネルギーの消費を減少させることに成功してきたといえよう。

ところが、一九七四年、石油ショックの直後、池田SGI会長は、公害問題の本質を単に技術的、経済的なものととらえるのではなく、一段と根源的な現代科学文明のあり方に根ざしたものであると主張し、文明の構造そのものの転換を訴えている。つまり、消費型文明から循環型文明へ、欲望拡大型文明から欲望調和型文明への転換である<sup>3)</sup>。この時から一五年を経て、一九八九年、世界は「地球環境保全元年」をむかえたといわれる。地球的規模での環境問題に直面して、地球環境問題が国際政治の焦点となり、各種の国際機関が次々と法的規制、宣言、条例等を合意している。一九七〇年代の公害は、汚染周辺の破壊にとどまっていた。ところが、現代では、地球全体そのものが破壊の悪

影響を受けている。つまり、奪命者の働きは、以前は、主として企業が関連する領域にとどまっていたのが、現今では、大気圏、海洋圏を含んで地球全体に及んでいる。また、七〇年代には、企業のエゴイズムがつくりだす産業公害が主流であったが一般の民衆がつくりだす環境汚染も当然、あらわれてはいたが、今日では産業公害とともに、日常生活のスタイルが生み出す環境破壊、汚染が増大し、被害者がそのまま加害者でもあるという、まさに「還著於本人」の様相を呈するに至っている。環境保全の対策は、パグウォッシュ会議の議題にもあつたように、第一に科学技術の推進、つまり環境問題の科学的現状認識や予測の研究、並びに省エネルギーの進歩とエネルギー効率を改善する技術の開発、クリーン・エネルギーへの移行があげられる。第二には、経済の分野の課題もある。特に現代消費社会の欲求と環境保全の葛藤をどうのりこえるかという問題である。また、経済システムそのものの転換も検討されなければならない。第三には、先進諸国から開発途上国への援助のあり方が、技術移転も含んで検討されなければならない。また、マイナスイメージとしての企業の公害輸出を監視し、阻止しなければならない。第四に各種の法制度の改革が要請されよう。これら、科学技術、経済成長、南北問題、法規制等の各分野を相互に関連させながら、地球環境問題へ国際的に対応していかなければならないのである。しかし、地球生態系の汚染、破壊という今日の現象は、一五年前に、すでにSGI会長が洞察しているように、またパグウォッシュ会議の議題に、人間の基本的欲求や消費社会のあり方がとりあげられているように、現代高度消費社会のあり方、さらには、現代西洋科学文明のあり方そのものに根ざしているのである。このことを、端的に示す現象が、CO<sub>2</sub>増加等によってひきおこされるとされる地球温暖化現象である。産業革命以来の化石燃料を主体とした科学文明のあり方が、地球温暖化の基盤にある。省エネルギーやクリーン・エネルギーへの転換が叫ばれ、また、科学技術、特にハイテクの進歩、駆使によって、汚染物質の除去、さらには再利用も可能になるであろう。CO<sub>2</sub>にしても、現状では、国際的法的基準の達成には排出量の抑制を主体にしなければならないが、将来、再利用の方法も加えることができるであろう。しかし、エネルギー多消費型経済発

展という現代先進国のあり方を持続し、目標とする以上は、エネルギー需要がクリーン・エネルギーだけでは不足となり、原子力への要請になったりする。ここに、エネルギー多消費型の社会のあり方、そのような社会を目標に進展する現代科学技術文明の基盤が根本的に問い直されるべき根拠がある。

## （二）高度消費社会の病弊

地球環境時代の諸課題の原因を、南北の視座からとらえると、北の先進諸国のエネルギー多消費型経済の追求と南の開発途上国での貧困の放置にあるといえよう。南の途上国では、累積債務をかかえ、その上、人口爆発が拍車をかけて、貧困の拡大再生産という悪循環に陥っている。先進諸国の側からの地球的視野に立った援助が不可欠であるが、開発途上国のとりあえずの目標は、何よりも生活基盤を確保し、人間の基本的ニーズに答えていくところにある。

現在の時点において、地球環境時代を生きのび、持続的開発を可能にしていく為のポイントは、先進諸国のエネルギー多消費型社会のあり方、それを支える現代科学文明のあり方を再検討することにあると思われる。南の開発途上国も、基本的ニーズに応えられる段階をこえると、先進諸国のような社会のあり方を求めていくであろう。南の諸国が、現在の北の先進諸国と同じような社会のあり方をめざせば、人類社会全体の「持続的開発」などは全く不可能となり、地球という生命的存在のもつ自然復元力、蘇生力をはるかにこえてしまうことは明瞭であろう。

日本等の先進諸国が享受している高度消費社会は、人間の欲望の拡大に支えられている。欲望拡大型社会、また欲望を中心とした文明といえるであろう。先進諸国は、「豊かな社会」をめざして、科学技術を駆使し、経済体制をととのえ、人間の欲望の充足をかなえるような方向へと進んできた。しかし、エネルギー多消費の欲望拡大型の社会、文明が、はたして、本来の意味での「豊かな社会」といえるのであろうか。「豊かな社会」とは、人間の物質的側面のみならず、精神的側面においても豊かな開発力をそなえた社会である。人間生命に潜在する豊潤な精神性をきた

え、発現させていく条件をととのえるところに、本来の意味での豊かな社会の役割がある。そのような意味でいえば、「豊かな社会」のなかで、人間は心身ともに幸福を享受しうることになる。

だが、はたして、先進諸国においてエネルギー多消費の社会、欲望拡大型の社会が、人間の幸福につながる「豊かな社会」になっているであろうか。また、このような社会の延長線上に、幸福なる人生が位置しているのであろうか。

ところで、仏教では、末法の世を「五濁悪世」ととらえる。『法華経』には、「舍利弗、諸仏は五濁の悪世に出てたもう。所謂、劫濁、煩惱濁、衆生濁、見濁、命濁なり」とある。天台大師は『法華文句』において、五濁のそれぞれを解説した後、五濁の次第について「次第は、煩惱と見を根本と為す。此二濁より衆生濁を生ず。衆生より連持の命あり。此四、時を経るを謂て劫濁と為すなり。」と説明している。つまり、煩惱濁と見濁が根本にあつて、そこから、社会、時代そのものの濁りまで生じてくるというのである。換言すれば、社会をおおっていく濁りの根源を追求して、その時代の人間の発現する煩惱と悪見を見出だすのである。人間生命内在の煩惱や悪見は、意識の領域にあるものばかりとは限らない。たしかに、明瞭に意識でとらえられるものも多いが、その底には無意識次元で働く種々の煩惱がある。

『唯識三十頌』において世親は、根源的自我としての末那識にまわりつく煩惱について、「我愛、我見、我慢、我癡なり」とのべている。つまり、意識的自我の基底にある無意識的根源的自我に、常に四つの煩惱がつきまとっているというのである。それは、我愛（貪欲）と我見（悪見）と我慢と我癡であるという。この四煩惱は、無意識の次元から働きかけて、人々の行動をつき動かしていくものであり、それを自覚にのぼらせることはむずかしい。私は、現代科学文明のつくりだしたエネルギー多消費社会の人間の幸福への多くの貢献を認めながらも、なお、今日、人類をはじめとする「生きとし生けるもの」の基盤をさえ破壊しつつある状況のなかで、この文明のもつマイナス面がいかに生じたかを、仏教で説く煩惱論の立場からとりあげてみたいのである。

経済学者の八巻節夫氏は、成長至上主義経済、欲望拡大型経済の根底に、現代人がとりつかれている固定観念があ

るとし、それを分析している<sup>(11)</sup>。エネルギー多消費型社会は、経済優先の社会でもある。故に、八巻氏の論調に即しながら、この現代社会の病弊を分析していきたい。八巻氏は、固定観念を六つあげ、その誤りである点を指摘している。列挙すれば、①「物的消費の拡大が人々を豊かにする」②「人間の欲望は無限である。それを満足する資源は限られているから、パレート最適を達成しつつ、間断ない経済成長を実現することが人々を幸福にする」③「個人的欲望の極大化（生産の極大化）が最も理想的な経済状態である」④「生産性の向上は進歩である」⑤「ゼロ成長は馬鹿げている。経済成長は必要であり、要は環境といかにバランスを保っていくかである」⑥「まず、全体のパイの拡大が先決である。経済成長しつつづけば、社会資本の充実や社会的貧困も解決できない」とある。ここにいる「固定観念」とは、仏教でいう「悪見」に相当すると思われる。「悪見」とは『成唯識論』では「諸の諸理の顛倒において推度する染の慧を性と為し、能く善見を障え、苦を招くを業となす」とある<sup>(12)</sup>。つまり、諦と理に対して顛倒見をもつ染の慧のことであり、苦の源となるというのである。仏教のなかでは、悪見は五悪見に分類されているが、その第一は「薩迦耶見」つまり、有身見・我見である。末那識につきまとう煩惱の一つでもある。これについては、「五取蘊に於て我・我所と執す」とあるように、自己を实体化し、そういう虚像の自画像をえがいて、それにこだわる心作用である。自分、自分のものにこだわり、強く執着し、他人、他人のものと峻別する働きである。『成唯識論』（巻九）では、この「薩迦耶見」を頂点として、百二十八の根本煩惱と、その随煩惱が展開していると説いている。

私は、ここでは、虚像の自我に執着する悪見、特に「薩迦耶見」が、八巻氏のいう固定観念を生み出しているとの視座から、現代社会にうずまく煩惱の展開について論じてみたいのである。まず、何よりも我・我所への執着は、貪欲を生み出していくであろう。貪欲とは、「有と有具とに於て染着するを性と為し、能く無貪を障えて苦を生ずるを業と為す」とある<sup>(13)</sup>。つまり、自分の氣にいったものを貪り、執着する働きであり、そこから苦が生じてくるのである。貪欲は、具体的には、五官への執着、即ち、色・声・香・味・触に対する欲望となって現れてくるであろう。現代的

に云い直せば、物質的欲望を主としたものである。

現代のエネルギー多消費社会では、この個人の我見の欲望をかりたて、最大限に発現すること、換言すれば、貪りつづけることが幸福であるという「悪見」につき動かされているように思われる。『唯識三十頌』にあげられた末那識にまとりつく煩惱の一つ、我愛でもある。その具体的觀念が、先ほど列挙した固定觀念のうち①②③である。しかし、我見・貪欲を原動力とする経済は、幸福につながらず、逆に不幸の状態をつくりだすと八巻氏は指摘する。その症例として、例えば①の物的消費を拡大していくと、人々が豊かになるとの觀念に対して、現実には、人々は満足感をおぼえず、逆に生活のあらゆる所で欲求不満が生じているという。欲求不満からは瞋恚が生じてくる。瞋とは、「苦と苦具に於て憎恚するを性と為し、能く無瞋を障えて不安と悪行との所依たるを業と為す」<sup>(15)</sup>のである。つまり、自分に執着して、自分の氣にいらぬものに瞋りをもつのであり、ここから不安と悪業が起こてくると記されている。この瞋恚は、さらに「忿」「恨」「惱」「嫉」「害」の随煩惱へと展開するといふ<sup>(16)</sup>。

現代社会において、欲求不満から瞋恚が生じ、「害」という暴力行為にまで発展することは少なくない現実である。②と③の固定觀念においては、人間の欲望は無限であるということを前提として認めて、それとの関連で経済成長を考えていくところに「悪見」たる所似があるろう。この点について、八巻氏は次のような角度から打ち破っている。第一に、今日の高度消費社会では、欲望は、人為的、人工的につくりだされているものが圧倒的であるという。五官への欲望を限りなく刺激するような商品によって、人工的に欲望を創り出して人間の本来の欲望を貪りへと化していくのである。人工的に創り出された貪欲は、次々と大量に出現する新商品群によって、欲求の充足と欲求不満と瞋りとのめまぐるしいアンサンブルと化するのである。ここに、不公平感も生じ、一方では一時の優越感にひたる人がいる。反面、劣等感にさいなまれるものもある。しかも、この優越感と劣等感は次々に交代していく。この心理を仏教では「慢」の煩惱として説明している<sup>(17)</sup>。

人工的貪欲によってふりまわされ、不平、不満、不公平感、慢、瞋恚等の煩惱につき動かされる末那識——意識的なこともあるが、今日では、ほとんどこのようなメカニズムは潜在意識のなかに忘却されてしまっているようである——のあり方は、まさに癡かという他はない。末那識にも「我癡」がまとりついているが、この「癡」については、「諸の理と事に於て迷闇なるを性と為し、能く無癡を障えて一切の染の所依たるを業となす」<sup>(18)</sup>とある。この「癡」は諸煩惱の根底にあるものとされる。それは、我・我所に執着して、無我・空という本来のあり方に迷闇なる故である。現代消費社会のなかにあって、人々は企業の論理、並びにそこにまとりつく「魔性」にとりこまれて、潜在意識の領域から、悪見（我見）を起点とする貪・瞋・癡等の煩惱を噴出させているのではなからうか。そして、そのような社会、文明のあり方に幸福を求めることこそ、仏教の無我・空の諦理に闇い、「我癡」のなせる業ではなからうか。人間の欲望は無限であり——しかも大多数は人工的に貪欲化したものであるが——それを充足するために、④生産性を向上させ、⑤環境とのバランスをとりつつ、⑥全体のバイの拡大を最優先する経済をめざすという固定觀念にも「悪見」の要素が含まれていよう。全体のバイの拡大は必要であるが、しかし、そのことによってもたらされるマイナスの要因、例えば、生産性の向上にとまらぬ競争社会のストレスの激化、環境汚染から破壊への進行、人々の不平等感の噴出を無視することはできないのである。心理的ストレス競争社会のなかにうずまき、社会的次元のストレスの人間身心への作用は、経済的、物質的な増大を——挙に無化してしまう性質のものである。さらに、貪欲等による地球環境への悪影響は、人類生存への基盤さえ奪ってしまうものである。八巻氏の「今日の環境汚染は、どれも肉眼で見えない。そして作用が長い。オゾン層を破壊するフロンの潜伏期間は九十二年もある。また癌の確率が高まるといつても、それはあくまで必然性ではなく蓋然性の問題に過ぎない。ここにどうしても現実の生々しい物欲に目がむけられ、環境破壊の進行が軽視される原因がある」<sup>(19)</sup>との指摘は、まさに、「諦理に迷闇」である現代人の「我癡」を表現したものであるろう。ここまで論じてくれば、もはや明らかなように、人間の欲望それ自体が、現代消費社会の核に位

置するといわなければなるまい。故に、現代社会、文明の方向を転換しようとするれば、欲望を直視し、その昇華の道をさぐる事が不可欠であり、肝要である。

### （三）欲望の昇華ということ

心理学の分野でフロイト理論（精神分析）と行動心理学の二大潮流に対して、第三勢力の心理学を打ち立て、さらにトランスパーソナルな領域へのかけ橋をつくったのは、A・H・マズローである。この心理学は人間性心理学ともいわれ、従来の心理学と違って、健全なる人間、成熟した人格への徹底した理解をはかろうとしている。その結果、やがて、第四のトランスパーソナル（超個）心理学へと入っていき、個的生命を超えた普遍的なるものへの洞察を可能にしていけるのである。つまり、健全なる精神、健全な人間性を探究していくと、個を超えた普遍的な領域へと導かれてゆくというのである。マズローは、この超個へとつながる体験を「至高体験」とか「超越体験」と呼び、この体験の意味を説明することを通じて、個性化の究極、自己実現の極地を示そうとしている。この超個の領域において、第四の心理学、つまり、トランスパーソナル心理学は宗教的境地、宗教的人格に到達していくのである。マズローが、健全なる人格、精神の実現に至高体験を通して、個を超越し、宗教的領域と重なる広大な宇宙意識を見出だした意義は、きわめて大きいといわねばなるまい。仏教で、マズローがさし示す超個の領域とは、まず唯識学派という「阿頼耶識」に相当すると思われる。さらに、その究極に、第九識としての「阿摩頼識」（根本清浄識）が位置しており、ここにおいて、個別生命は宇宙大生命としての仏性と融合し、個的自我は「大我」と一体化する境地に達するのである。宇宙生命に立脚し、大我と一体になった個的自我として生きる人格における煩惱のあり方について、大乘仏教では「煩惱即菩提」の法理を提示している。例えば『普賢經』には次のように記されている。「煩惱を断ぜず、五欲を離れずして、諸根を浄め、諸罪を滅除することを得、父母所生の清浄の常の眼、五欲を断ぜずして而も能く諸の障外の事

を見ること得べき」と記されている。煩惱を消滅させたり、色欲等の五欲を離れて、そこに幸福境地、つまり菩提の境地を求めるのではなく、あくまで煩惱、五欲に即しながら、五根という感覚器官にそなわる能力を清浄化し、煩惱によってつくりだされる諸罪を除くことができるという意味である。

日蓮大聖人は、御義口伝において、煩惱即菩提と生死即涅槃の法理について、次のように記されている。「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉るは生死の闇を照し晴して涅槃の智火明了なり、生死即涅槃と開覚するを照即闇不生とは云うなり、煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり、煩惱即菩提と開覚するを焼即物不生とは云うなり」<sup>(21)</sup>。また、同じく御義口伝に「身意泰然とは煩惱即菩提生死即涅槃なり、身とは生死即涅槃なり、意とは煩惱即菩提なり」<sup>(22)</sup>。「身とは生死即涅槃なり、心とは煩惱即菩提なり」と仰せである。

ここに記されているように、生死即涅槃は身体（色法）の側面をさし、煩惱即菩提は意・心（心法）の側面をさす法理であり、しかも二者は相即しているのである。生死の苦しみ——四苦八苦——という不幸の状態を涅槃という不壊の幸福境地へと転換していくためには、人間精神、心の側面の質的転換がなされなければならない。その心の転換の法理が、煩惱即菩提である。そして、煩惱が菩提へと質的転換をとげるに即して、生死の苦しみは涅槃の樂へと転じていくのである。

では、煩惱はいかにして菩提へと質的に転換されるのであろうか。日蓮大聖人は、煩惱を断ずるのではなく、五欲を離れるのでもなく、煩惱という薪を焼いて菩提の慧火が現前化してくると仰せである。煩惱の薪を焼く火——法性の智火——が、宇宙生命の当体としての南無妙法蓮華經である。この宇宙生命にそなわる仏の智慧によって、煩惱が智慧の火に質的転換をとげ、昇華されていくのである。生命のなかにおける煩惱即菩提の法理の現前化、そして生死の苦悩との対決、超克から開示される涅槃の境地に生きる人格の形成を、仏教は目標にしている。このような人格はマズローやトランスパーソナル心理学者が、至高体験等を通して求める健全なる人格、健全な精神の究極に位置する

ものであろう。

ところで、現代消費社会においては、健全なる人格の形成は、種々の条件によって阻害され、むしろ、多くの精神的にゆがんだ病的人格をつくり出している。物質的豊さのなかで、精神にゆがみを生じ、未成熟のままにとどまる人間群が余りにも多い。先進諸国における現代人の多くは、エネルギー多消費の文明におぼれて、我見や貪欲等の煩惱にふりまわされ、幸福を求めながら、数々の不幸をつくりだしている状況は、すでに見てきた通りである。特に、その不幸が一個人にとどまらず、今や、地球的規模で全人類、全生物にまで及ぼうとしている。未成熟で、ゆがんだ人格、精神が病的になった人格を、人間的に成熟し、個性化をとげながら、その究極において、宇宙生命と融合しつつ、宇宙の大いなる我（大我）を自己の我として生きようとする人格へと昇華していくために、生命内面から噴出する種々の煩惱を善提へとどのように質的転換を上げていけば良いのかといった課題を、ここでは、マスローの欲望論を借りながら説明してみたいのである。つまり、究極的には宗教的領域に達するための具体的ステップとして、煩惱、欲望のあり方の転換を示して見たいのである。

マスローによれば、欲望にはヒエラルキーがあるという。第一に生理的欲求、第二に安全の欲求、第三に所属と愛情の欲求、第四に尊敬の欲求、第五に自己実現の欲求である。ここにおいて、生理的欲求（植物的機能と連結）と安全の欲求（動物的本能と連結）は欠乏欲求であり、求める欲求であるという。それに対して、愛情の欲求、尊敬の欲求、特に自己実現の欲求は成長欲求であるとする。そして、マスローは、低次欲求の充足の上に、高次の成長欲求が出現してくるというのである。<sup>24</sup> たしかに、一般的に、健康な精神のあり方からすれば、マスローがいうように、低次欲求は生命の維持の基本的欲求であるから、これを犠牲にしては、高次欲求は成立しえないであろう。その意味では、求める欲求の充足が成長欲求の基盤となるといえよう。

このような欲求のヒエラルキーからいえば、世界人口の大多数をしめる開発途上国においては、欠乏欲求の充足が

急務である。生理的欲求や安全欲求が充たされてはじめて、人間性にあふれる社会、またそのなかでの各個人の自己実現の探究も可能になると思われる。先進諸国は、開発途上国の人々の欠乏欲求が充たされる社会状況をつくるための援助（経済的、技術的援助）をしなければならず、また、そのことが、先進諸国の人々にとっても、欲望の昇華の道でもある。

問題なのは、先進諸国の経済至上主義、生産性第一主義にのっとった欲望拡大型社会のあり方である。この場合の欲望とは、例えば、マスローのいう欲望のヒエラルキーのどこに位置するのであろうか。先進諸国において、欠乏欲求である生理的欲求が充足されていることは確かである。また、その充足の上に発現するとされる安全欲求——つまり、安全で快適な状況を求める欲求もほぼ充たされているといえよう。この欠乏欲求が充たされると、成長欲求としての所屬と愛情の欲求が生じると、マスローはいう。所屬と愛の欲求とは、自分が所屬する集団の中であって、孤立をさけ、一定の位置や地位を望むことによって、他の人々との関係を維持しようとする欲求であり、その人間関係は、信頼にみちた健康で愛情にあふれた関係であるという。次に出現する尊敬（承認）の欲求も、社会的次元で発現する欲求である。この欲求には、自尊と他者からの承認の二つの要求が含まれるという。自尊心は、自分の能力や自信に関するものであり、他者からの承認とは、批判や注目、名声に関するものである。この欲求が拒否されると、劣等感や無力感が表出するという。成長欲求の最終に出てくる欲求が、自己実現の欲求であり、これは、マスローが存在価値と名づける真善美、正義、個性化、自己充実、人生の意味、躍動等によって動機づけられるものであるという。自己実現の欲求が、トランスパーソナルな領域を通して、宇宙生命そのものに通じていくことは、すでに論じてきた通りである。

成長欲求は、先進諸国において充足され、また自己実現の欲求へと向かっているかといえば、残念ながら、欠乏欲求が充たされているにもかかわらず、ほとんどの成長欲求が出現し、また成長しつつあるとは思われない。例えば、



所屬と愛の欲求にしても、マスローが記述するような健全なあらわれ方をしているとは思われない。また、尊重（承認）の欲求においても、健全な姿ではあらわれず、自尊心が慢心となり、また逆に劣等感や無力感にさいなまれる人々も多い。欠乏欲求が充足した、いわゆる「豊かな社会」において、成長欲求が健全な形で姿をあらわさないのは、欠乏欲求そのものの充足の仕方の問題があるように思われる。換言すれば、欠乏欲求自体がゆがめられ、本能的充足をこえて、貪欲化しているからであろう。

欠乏欲求を肥大化させ、貪欲化させたのは、高度消費社会においては、人々の固定観念、つまり、「悪見」である。特に「我見」という自己自身と自己のものに執着する自我のあり方である。このような社会における「欲望」とは、物質的欲求を基本とし、しかも、この欲望が「悪見」や他の煩惱によって肥大化し、ゆがめられ、人間本来の性質を失ってしまったのではなからうか。「悪見」によって貪欲化した現代の「欲望」は、末那識につきまとう他の煩惱、つまり、「我癡」「我慢」等をもとりこんで、人間性の輝きを失い、「魔性」の性質をおびているようである。この欲望の「魔性」が、欠乏欲求としての生理的本能的欲求や安全欲求のあり方を奪命者的にゆがめ、さらに、社会次元で発動する成長欲求としての所屬や愛の欲求、尊敬（承認）の欲求をも、他者の生命を傷つけ、破壊するような方向へと転落させているのである。

人間のすべての欲求——欠乏欲求から成長欲求まで含めて——に「魔性」の色彩をおびさせた基点に、八巻氏が指摘する「固定観念」、つまり、「我見」を根幹とする種々の煩惱を見出だすのである。この煩惱が、重層し、複雑化しながら、個人の煩惱濁、見濁、にとどまらず、命濁、衆生濁として社会をおおい、先進諸国を筆頭に前進するかに見える経済第一主義の煩惱拡大、生産性至上主義という現代文明の方向を、地球そのものの破壊——劫濁——へと転落させているのではなからうか。この生命内奥から噴出する「魔性」——仏教的にいえば、超個の領域、宇宙根源の領域からわき出づる、「生きとし生けるもの」を破壊さすエネルギーをぬぐい去る方向へと向かうには、まず、何よりも、

現代先進諸国の民衆一人一人が、この社会に当然のように定着している「固定観念」、特に「我見」をのりこえるところから出発しなければならぬのではなからうか。「我見」「悪見」を超越するライフスタイル——それは、自己と自己のものへの執着をこえる智慧と行為であり、社会次元、人類次元での他者との共存、他者の痛みを同苦し、共存する生き方、仏教的にいえば、慈悲の生き方のなかに確立されるものであろう。

御義口伝にある「煩惱の薪を焼く」ようなライフスタイルを一人一人が貫いていくことによって、「菩提の慧火」が輝き、その光に照らされて企業の論理のはらむ「魔性」、そして、今まで、ともすれば忘れがちであった人間生命内在領域の「魔性」を見破ることが、現実生活の場で可能になるのである。先進諸国においては、消費者がそのまま加害者の側面をもち、「悪見」にひきずられて、「魔性」の存在に気がつかないことが余りにも多い。他者の生命を傷つけ、破壊するようなライフスタイルからの転換、即ち、生き方の転換が、その人の生命内在の欲望のあり方を変え、貪欲と化した欲望を、本来的な姿、人間性に輝く姿へと昇華していくのである。その欲望のエネルギーの昇華のあり方を示したのが、マスローの欲望の段階説であろう。「悪見」をこえ、「我見」への執着を打破し、「生きとし生けるもの」との共存、調和をめざすライフスタイルの人々の生命内奥からは、たしかにマスローのいうように、欠乏欲求から次第に成長欲求、そして自己実現の欲求が表出されてくるものと思われる。自己実現、個性化の究極における成熟した人間の生き方において、宇宙生命にそなわる「存在価値」に動機づけられて、自己実現の欲求、他の成長欲求、欠乏欲求が調和しながら、しかもダイナミックに歓喜の生を創造していくであろう。このような人間の生き方、ライフスタイルの確立こそが、現代科学文明社会の死から生への「回転軸」をなすのである。

## 注

（1）「地球環境のキーワード事典」、環境庁総務課、一九九〇年、中央法規

- (2) 「日蓮大聖人御書全集」四六九頁、大石寺版
- (3) 「池田会長全集」講演編1、一九七七年、聖教新聞社
- (4) 「妙法蓮華経並開結」六三四頁、大石寺版
- (5) 「地球温暖化を防ぐ」環境庁「地球温暖化問題研究会」編、一九九〇年、NHKブックス
- (6) 「地球環境読本」、一九九〇年、日本経済新聞社編
- (7) 「地球環境のキーワード事典」、環境庁総務課、一九九〇年、中央法規
- (8) 「妙法蓮華経並開結」一七〇頁、大石寺版
- (9) 「妙法蓮華経文句卷第4下」大正蔵三四卷、五三頁上
- (10) 「唯識三十論頌」大正蔵三一巻、六〇頁中
- (11) 「経済と環境と宗教」八巻節夫、東洋学術研究、一九九〇、vol. 29, nos. 3
- (12) 「成唯識論卷第6」大正蔵三一巻、三二頁下
- (13) 同前
- (14) 同前、三二頁中
- (15) 同前
- (16) 同前、三三頁中
- (17) 同前、三一頁中
- (18) 同前
- (19) 「経済と環境と宗教」八巻節夫、東洋学術研究、一九九〇、vol. 29, nos. 3
- (20) 「妙法蓮華経並開結」六七四頁、大石寺版
- (21) 「日蓮大聖人御書全集」七一〇頁、大石寺版
- (22) 「日蓮大聖人御書全集」七三三頁、大石寺版
- (23) 「日蓮大聖人御書全集」七三五頁、大石寺版
- (24) 「完全なる人間」、マスロー、一九六四年、誠信書房

(かわた よういち・研究所長)